



とくろゆる

Drag Royal

小説 葉原鉄 挿絵 かん奈

第一章

竜の主にお薬を！

006

第二章

聖女におまかせ

062

第三章

龍王様は交尾がお好き

126

第四章

黒竜の種で孕みたくて

184

終章

真名の絆

251

登場人物紹介

Characters



ヘルダ

高慢で我が侷な王女だが、生まれつき病弱。ルードの体液が身体にいいという事で、彼を王城に住まわせる。

ノア

ヘルダに忠誠を誓う戦闘シスター。無表情で物静かな外見だが、実は情に厚い美女。

カクたん

東方から落ち延びてきたという自称・皇后。ヘルダの城に客人として招かれている。謎の少女。

ルード

元は若い黒竜だが、ノアに破れて人間の少年の姿で王城で生活させられる事になる。

「そ、そうか……？ でも、もう痛くはしないぞ。本当だぞ」

ノアに嫌われたくないから、乱暴に揉んだ分だけ優しくいたわることにした。

（たしか、腋から乳首にかけて撫でるんだっけ）

ドラグピエルの言を参考にするのは癪だが、ノアに苦痛を強いるよりはずっといい。

まずは腋に指先を当て、背中からはみでるほどの横乳へと這わせつつ、手の平全体をあてがうようにして、球面を描いた下乳へと滑らせていく。

力を入れないよう気をつけても指が沈む。わずかな圧迫で全体がプルプル震える。

「も、ものすごい胸だな。ノアの胸はなんだかものすごい」

「はッ……ああ、ルード様……」

甘く響く吐息まじりのかすれ声は、ルードが弄ばれたときにあげた声と同質だ。

生唾を何度も嚙下し、ベールに隠された耳元に口を寄せる。

「もしかして、感じているのか？」

「そ、それは……んくッ」

尼僧の押し殺した声が、鼻から抜ける前に甲高く弾む。ルードの指先は、楕円球の丁度先端に沈みこんでいた。この敏感さからして、ペニスで言えば張りだした笠と同じような場所なのだろう。

（人間の女もぼくと同じように、恥ずかしい感覚に悶えたりするんだな）

羞恥に声を殺す気持ちがあるからこそ、ささいな息遣いに生々しい興奮を誘われる。

自分でも不思議なぐらい、昂揚と執着が芽生えていく。指先でクリクリとこね、手の平で乳房の横を優しく撫でてやると、面白いぐらいノアの背筋がのけ反る。ペールが鼻先に当たるのも、わずらわしいどころか奇妙に琴線をくすぐった。

「う……んっ、んっ、ああ……あつ、あつ、ああっ」

切なげな声は母性を司る突起をいじるたびに色気を孕んで高くなっていく。そして、豊熟すぎた乳房の先にも異変が生じた。

「ここ、なんだか硬くなってないか？　なんだか、ぼくのアレみたい……」

尼僧衣の下に一枚の布を挟んで、尖ったものが服を押しあげている。そこには哺乳類が赤子に栄養を与えるための、乳首という器官があるはずだ。

「ひああ、言わないでください、ルード様……」

ノアの腰が左右によじれて劣情を掻きたてる。

下腹が無性にモヤモヤした。胸が高鳴って、熱い血と神経の熱が指先に募っていく。「やっぱり、どんどん尖って……ぼくのペニスと同じだ」

硬い部分に爪を立ててほじくり返してみた。いじくればいじくるほど乳首は尖鋭化するのに、たわわな双山は乳液がにじみだしそうならい柔らかくなっていく。そのまま手が飲みこまれてしまいうだが、ノアの胸が相手ならそれでも構わない。

「ひんっ、んあっ！　ペニスだなんて、ああ、いやあ……！」

首を傾けて悶える仕種もどんどん大きくなる。ペールから覗ける頬が、しつとりと湿っ

て汗の匂いを漂わせた。鼻をすり寄せて、鱗を持たぬ者の肉の芳香を嗅ぐ。

(いい匂いだ……薔薇の香よりずっといい)

酩酊してふわふわになった頭に、ノアの声が不意打ちのごとく突き刺さった。

「ル、ルード様のも、どんどん硬くなっています……お尻に、当たって……」

言われて初めて気づく。我知らず、いきり立った股間をノアに擦りつけていた。

もっちりとした厚みのある柔尻は、抜群の弾力で硬棒を押し返している。

弄ばれたときのように猛烈な羞恥心が、ルードの脳を急激に掻きむしった。

「す、すまない。きみにひどいことなんてしたくないのに……ごめん、ノア」

心残りはあるが、乳房から手を離して一步下がる。

ノアが汗ばんだ顔で振り向いてくると、眼鏡をかけた無表情で責められていたよう

な気がした。欲情に囚われて女を辱めるなど、誇り高い黒竜にあるまじき行為だ。それも、

他ならぬノアに対して。

後悔にうつむいて、拳が鉄のように固まるまで握りしめた。ノアの手が頬に触れてこな

ければ、不安に押し潰されて涙がこぼれていたかもしれない。

「ひどくありません。恥ずかしいけれど、嫌な気持ちではありませんでした」

顔を上げると、頬を赤らめた尼僧がまたついつと顔を逸らした。一方で、その手は臆す

ることなく温もりをもって少年の黒髪を愛撫している。

「ただ、ルード様がなんだか可愛らしくて……うろたえてしまっただけです」

「可愛い？ ぼくが……？」

どくん、と股ぐらになにかが流れこむ。神経がただれるような魅惑の熱感だ。海綿体が爆発的に膨張し、一瞬で脳髓が白んでいく。

ヘルダに可愛いと言われるのと違って、屈辱的どころかやけに嬉しい。逸物も跳ね動いて喜悅する。根元から千切れそうなほど激しく、ズボンを破かんばかりに荒々しく。

「ノ、ノア、ぼく、ぼくは……！ 股が、爆発しそうになってきた！」

股間のうずきに突き動かされ、ノアに正面から抱きついた。

「と、殿方の生理的な反応です。姫様にお薬を出せば、それで収まるかと……」

ノアが突き放そうとしないのをいいことに、どんなクッションよりも柔らかな熟乳に顔をうずめた。しかし、進む衝動はそんなことでは収まらない。

「いやだ……そうじゃない！ ぼくは、ノアに出したいんだ！」

偽らざる本心を、力いっぱい叫ぶ。

ノアの顔が柘榴色になるところからして、人間の基準からしても相当恥ずかしいセリフだったのだろう。ルードの顔もペニスと同じぐらい熱くなる。

そんな中で脳裏に浮かぶのは、行為を後押しするような父の言葉である。

—— ちんちんは喜んで気もちよすぎた。

「しゃ、しゃがんでくれ、ノア」

「は、はい……？」

「お願いだ……ガマン、できないんだ……！」

ノアの肩をつかみ、力を入れてひざまずかせた。すかさずズボンをずらす。竿肉は飛びだすなり激しくしなつて、眼鏡を勢いよく叩いた。ぬらりと長い糸が伸びる。

「あんっ……も、もう、こんなに濡れてるなんて……」

ノアは切れ長な目を丸くして、先走りにまみれたペニスを凝視した。視線にこそばゆさを感じても、隠そうという気は起こらない。ついさつき足で搾り取られて汚れていることも気にしていられない。

——ちんちんはさんで気もちよすぎた。

汁糸を引きずつてノアの美貌を汚してから、黒炭色の着衣にできた深い谷間で逸物を挟んだ。両手で左右から圧迫すると、女の皮下脂肪が上下に溢れ返る。

その際に服の皺が亀頭に食いこんで、予想外の苦痛が走る。

「ぐうう、い、いたっ……！」

「あの……粘膜は弱いものですから、布にこすりつけては裂けてしまいます」

ノアは頬を赤らめても表情を浮かべない。ただ、かすかに下がった眉は、羞恥のためというより気遣いのためのように見えた。そんな優しい尼僧の胸にもっとも敏感な部分を預ける悦びが、ルードの身体を駆り立ててやまない。

「止まらないんだ……！ ノアの胸で出したくて、たまらないんだ！」

あ、うう、とノアはうめいたかと思うと、深くうつむいて声をひそめた。

「……すこし、お待ちください」

困惑に震える両手が自身の背中に回された。

ぢぢ、と金具のずれていく音が、少年の心を焦らしてくすぐる。乱れゆく呼吸を持ってあましている、やおら眼下の黒炭色が白色に変わった。

かすかに桃色を帯びて、水分のてかりをまとう柔肌だった。

「服よりは肌のほうが、摩擦が少ないかと……」

尼僧衣が首から腹まではだけられ、晒された首元は顔から地続きの紅色。そこから色が薄まっていき、丸まると膨らんだ黒下着の縁まで桜色が行き渡る。

「す、すごい……きれいだ……」

ルードは感嘆のあまり光の息吹ブレスを吐かんばかりに熱く息をついた。肌に見える範囲はヘルダのドレス姿と大差ないが、柔肉の量と谷間の深さは数段上だ。ヘルダも宮廷の女官と比べると胸が小さいわけではない。ただ、ノアの乳房はあまりに規格外である。

なにより、熟した桃のように甘い香りが本能を揺さぶる。

男根は餓えた獣のように、黒下着の上から果肉の中心にかぶりついた。

「はっ……あつい……」

正面から谷間を貫くと、先走りだけでツルリと滑って深みにはまる。引きつれる痛みはなく、乳房の感触が直接的に染みこむ。

「くうう……やわら、かしい……！」

吸いこまれるように腰を押しつけていく。ペニスの根元で黒下着を押しやると、肩紐がずり落ちて半球状の胸当てがぼろりと落ちる。黒地からはみだした桃色種は、すぐさまルードの下腹に押しつけられて姿を紛らわせた。

「んはっ……」

尼僧の喉奥から芳しい声音がこぼれた。ルードが本能的に腰を揺ると、下腹と乳頭が擦りあって、同じ声音が断続的に漏出する。

「ノアも気持ちいいんだね……ぼくもノアに包まれて、すぐ気持ちいい……!」

ペニスが一分の隙もなく乳肉に覆われていた。どれだけ強く挟んでも、たっぷりした肉づきのおかげできつすぎることはない。どこまでも奥深い柔らかさで、上下動する肉茎を包みこんでいる。

愉悅の痺れに尿道が震え、トプトプと液汁が溢れだした。潤滑剤を得て腰の動きが激しくなっても、亀頭が乳房からはみ出すことはない。

「こ、こんな気持ちいいなんて……! すごいよ、ノアの胸は、最高だ……!」

父の言葉に偽りはなかった。乳房で男根を挟む行為は天国のように幸せで心地よい。
(それとも……ただの女じゃなくて、ノアの胸だからかな)

とびきり大きくて、とびきり柔らかくて、先端のピンク色が硬くて愛らしい胸を備えた尼僧のことが、愛おしく感じられた。彼女が恥じらいながらも心地よさげに背筋を震わせると、快楽の共有感でルードの背骨まで痙攣した。



「んああッ、熱いです、ルード様……お口でしているときより熱くなって……！」

ノアはうつむいたまま、前髪で赤らんだ顔を隠している。後ろから乳房を揉んでいたときと同じで、吐息ばかりが熱く感じられる。

「か、顔、見せてくれないかな……！」

「そ、それは……なんだか、恥ずかしいのです」

「見たいんだ、ノアの顔……！ ぼくのコレ……チ、チンポを胸で挟んで、ノアがどんなにきれいな顔をしてるのか、見たい！」

攻撃的に腰を突きあげると、大きくバウンドした乳房がノアの顎をぱちゅんと叩いた。ふたつの白い弾球が真下に落ちるとき、わずかにはみだした亀頭がノアの顔を打った。

「ほら、はやく顔を上げないと、せっかくキレイなのにベトベトになるよ……！」

腰を思いきり突きあげ、同時に乳房を引き下げる。顔を突くための要領は、そのまま摩擦を強めて快感を高めることに繋がった。

（ひどいことはしたくないのに、気持ちよくて止まらない……！）

興奮のあまり自制できずにノアの顔を滅多突きにした。冷たい眼鏡やなめらかな頬、柔らかな唇と、突くたびに違う感触が愉しめるうえ、ときどき熱い吐息が絡みつく。竿先の愉感と、豊熟の乳果実に包まれた肉幹の悦感が、過敏なカリ笠でぶつかりあう。

「くうう……ノ、ノアの胸、ノアの、胸え……！」

「はうっ、あああ、ルード様の先のほうがどンドン膨らんでいますう……！」

どこか陶然と開いた唇の間に、腫れあがった赤い爆弾がちゅぷりとはまりこんだ。舌にぶつかって湿潤感に満たされ、強張った鈴口が断末魔の蛇のように暴れだす。引きずられた睾丸が内に秘めた生命のエキスを沸きたたせた。

射精直前の気分がこれほどまでに陽性の昂揚感を呼ぶのは初めてだ。強要されたのでなく、自分の意志で精を出すことは、魂が燃えさかるように気持ちいい。

「出すよ、出すよお……！ ヘルダ様じゃなくて、ノアにたっぷり出すんだあ！」
全身がペニスと一体化して硬直し、手の平が乳肉を無惨なまでに握りつぶす。

「ああああ、ルード様あ……！」

尼僧が口内の亀頭に吐きかける声は、苦痛よりも悦楽に満ちた喘ぎに聞こえた。拒絶されることなく歓喜を分かちあうような感覚が、最後の火花を肉棒に散らす。

熱した陰茎は液濁の噴水と化した。

どぴゅんっ！ びゅぐぐっ！ びゆるううー！ びゅうううーっ！

無理やりイカされたのではなく、みずから望んで放つ精液である。なんの障害もなしにペニスから脳髄へ一直線、オルガスムスの快感が逆流する。

「くあああああ！ す、すごい……こんなに気持ちいいの、初めてだあ……！」

指の間からぷっくりはみだすほど豊満な乳房の中で、愉悦と痙攣は収まるどころか大きくなっていく。射精しながら腰をよじり、竜殺しの聖女の柔らかさを堪能した。

「ああ、精子が、たくさん、はうう……どろどろです、ルード様あ……！」

「ああ、んっ、わ、わしをだれじゃと思うておる？ 龍はの、処女であつても人と違つて膜などない……」

ルオは悠然と笑おうとして、はつと息を飲む。

「あの……ルオ様、初めてだったのですか？」

「んっ、むう、気を遣わせとうはなかつたが……」

淫らな態度の数々から、さぞや淫戯慣れた女性なのだと思ひこんでいた。しかし、彼女は故郷において雄の色目を無視しつづけていたとも言っていた。先ほどの独り言の内容もある。ノアと同じく未通の処女だとしてもおかしくはない。

不思議な感慨がある。感動と言つてもいい。龍王のすべてを独り占めしたような満足感が股ぐらに充溢している。

「んっ、正直すこし怖いかも知れぬ。裂けそうならいギチギチじゃのに、もっと根元まで食べたいと思えるのじゃから……ほほ、おぬしの極太の虜になりかけておるの、おそろしやおそろしや」

ちゅっ、ちゅっ、と口回りに吸いつかれた。歓喜にペニスが脈打つて、こぢんまりした膣肉をぐりゆぐりゅつとえぐる。

「はっ、あつ、ああーっ……ぶ、ぶつといのじゃあ」

ルードは龍王が反り返つたまま倒れないよう背を支えた。せつかくなので、細い身体の手触りを確かめるように、わき腹を強めに握りしめる。幼い肉体は初めての交わりに震え

ながらも、歡喜に熱くなっていた。

「たまらぬう……はんんッ！」

ルオは背中を支えを頼りに腰を円運動させ、「ひゃつ」と過敏に胴震いする。その動きで狭隘な膣肉がカリ首に馴染んで、すこしずつ結合が深まっていく。

頬を擦りあわせ、おたがいに喘ぎを聞かせあいながら、肉棒が六割ほど入ったところにちゅくつと行き止まった。根元まで入らないのは体格からして仕方ない。苺みたいに赤らんだ顔は、ルードの目線より下にあるのだ。むしろよく壊れずに飲みこんでくれたものだと、感動の心持ちすらある。

「あああ、みっちりしてて、中がザワザワ動いて……くんッ、すっごく気持ちいいです……！！」これが、龍王のおま○こなんですわね……！！」

内側に張り巡らされた小粒の肉襞は、愛情をこめて男の象徴をこすってくる。そのたび、わずかな隙間で愛液が流動してクチュクチュと音が鳴る。そのぬめりがなければ、狭すぎて痛みを感じていただろう。

「んはっ、あんう、まだまだこれぐらいで気持ちいいなどだらしない……わしは、根元まで食べ食べするまでえ……止まらぬ、ぞ！」

紅葉のような手が、腰を優しくつかんだルードの手に重ねられ、ぐっと力がこもる。尻をよじったかと思えば、右脚が高く上がる。ルオの右足と左足がルードの右脇で揃い、繋がつたまま薄い背が向けられる。

「ぐっ、はうう……！ 後ろからのほうが、根元までえ、入りやすいからあ……んあああ、ぶ、ぶっとすぎて、ねじれがあ……イケズなちんぼめえ……！」

少女の肢体はルードの腕からこぼれ、四つん這いの体勢になった。腰布は尻の脇にこぼれたので、やはり結合の邪魔にはならない。

「くあああ、ル、ルオ様あ、急に締めつけの、角度が変わって……くんッ！」

快感に腰が吊り上げられた。膣奥に亀頭がめりこんで挿入が深くなり、膣膜に包まれる範囲が広まっていく。濡れた蛇に巻きつかれたかのような締めつけと、適度にたわんで膨脹を受け入れる柔軟さに、海綿体が愉悅の律動をきたす。

「アハあっ、わしのま〇こはキツいのに伸び伸びじゃろ……ひゃふッ！」

不意にルオの背が反り返り、亀頭の先がなにかに噛みつかれた。快感なのか痛苦なのか、にわかにはわからない強烈な刺激に、ルードは身悶えをする。

「ぐっ、あああ！ こ、ここ、すっごい……！」

「んうう、よいぞお、子宮の口でもお、ぶっといちんぼうまうまじゃあ……あんっ」

先端が子宮口にめりこみ、吸搾されていた。小ぶりの尻を見下ろし、限界以上に割り広げられた肉口に竿棒が根元まで啜えこまれているのを確かめる。昂揚感に満身が痙攣し、快楽が一点集中で亀頭に流入した。

とっさに脈打つペニスに力を入れ、暴発を防いだ。

（ま、まだイクな……！ もっとこすったほうが、絶対にキモチいいから……！）

絶頂を無理に止めた鬱積をぶつけるかのように、乱暴な手つきで腰をつかんだ。

「こ、こすります！ えぐります！ 突きまくります……！」

「あんっ、やあん、るうどがどーぶつみたいになんて荒っぽくなつたのじゃあ」

一支族を束ねる王にしては、あまりにだらしなく緩んだ嬌声だった。

ルードは彼女の後ろから、ゆっくりと腰を振りだす。

狭くて小さな秘裂は、愛液でぬかるんでいるので動くのには申し分ない。ぽぢゅ、ぽぢゅ、と肉っぽい音が鳴り、突き刺すような摩擦感にペニスが燃えた。

「あっ、あっ、人の男は女を強引に犯すときにこの体勢を好むらしいが……ああんッ、顔が見えぬと本当に、無理やり手込めにされておるようじゃ……！」

確かに四脚動物であれば四つん這いで交わるものだ。無理やり犯すという仮定なら、この体勢は女に殴られたり噛みつかれたりする心配もない。

（龍王を無理やり犯して孕ませるなんて、すごく不遜で傲慢なことなのに……！ ドキドキして、たまらない！）

視界に映るのは後頭部で、淫蕩な表情は見えないけれど、うなじがヒクンと反る様が卑猥な想像を掻きたてる。きつとだらしなくもいやらしく緩みきって、おいしそうなヨダレを垂れ流しているのだろう。

ふと、すぐそばに鉱泉があることに気づいた。水面には四つん這いの少女が唇を開き、舌から大量のヨダレをこぼしている様子が映っている。

「はあつ、ああーつ、こ、こうびい、種つけえ……！　るうどお、よいぞ、るうどお」

細かな贅肉を掻き擦るにつれて、水面の幼貌がだらしなく緩んでいく。子宮を軽くノックしてやると、それだけで体温が上昇し、顔中に玉の汗が浮かぶ。

どこまでも雌の顔だった。頭頂の一本角すら愉悅に震えている。どんなに幼く見えても、皮膚と肉膜は快感に潤んで雄を欲している。

（だったらぼくも、もつと雄らしく……！）

雄叫びをあげ、腰を離しては押しつけを狂ったようにくり返す。

「ひあああッ、中が焼けてくうのじゃあ……こ、交尾すごいいい！」

淫らな声をあげるたび、狭隘な股ぐらの水音が大きくなる。突きこみが強くなればなるほど、膣肉は柔らかかみを増して水気たつぷりに逸物を抱擁してくれる。味わえば味わうほど、窮屈な締めつけ以外の悦びを見出すことのできる豊かな快感源だった。

（ルオ様のことしか、考えられなくなる……！）

ルードは心の底まで龍王に耽溺し、薄いながらもぷるんと柔らかな尻肉をもみくちやにした。ペニスに新たな刺激が欲しければ腰を左右によじる。

突きながら背中をさすって、皮膚のなめらかさに感嘆する。肩をつかんでのけ反らせる。と、ただでさえ狭い締めつけにきつく角度がついて、男根の根元が感悦の悲鳴をあげる。彼女が小さいのをよいことに、肩越しに顔を撫でまわしてみれば、ちゅばちゅぱつと指をしゃぶられて有頂天まで気分が高まる。

しかし、どんなに愛撫をしても手先が心に追いつかない。それほどまでに愛おしい。悔しさのあまり、突き殺さんばかりの激しさで幼裂を掘り返した。

「あーっ、あーっ、ずんずん響くう！ 大人ちんぽお、腹の奥まで感じておるう！」

亀頭が子宮口にぶつかるとびにルオの細い手足がよろめき、すこしずつふたりは前進していく。子宮へのめりこみもいっそう深まり、ルードの引き締まった腹とルオのプリンと丸まった尻がピチピチとぶつかる。小さな尻であった。成熟した女は男より腰骨が広いものだが、龍王の童尻は細身のルードよりも幅が狭い。

そのくせ、膣部は青筋の浮かんだ極太でめいっばい拡張されていて、無惨なほど淫靡な充血が皮膚に及んでいた。淫唇はめくれ返るたび、クリーム状に泡立った甘露汁をぐぼぐぼと溢れさせる。快楽のエキ스는細い柔腿をゆっくりと滴っていく。

「ル、ルオ様、いやらしい……！ 小さいのに、感じすぎです……！」

「はんんうう、じゃってえ、赤子を産めるのじゃぞ……！ わしのような婆が、愛らしいおのこに犯されて子を孕むなど、はくッ、ああああん！」

龍王にこうまで淫らな声で子種を求められて、応えなければそれこそ無礼だ。

ルードは彼女が岩壁に押しやられていることに気づきながら、小股の奥をさらに滅多突き、ピストンを受けるたび嬌声まみれで腰を浮かせた。

「あああつ、ふ、ふわふわじゃ……！ 頭も身体もフワフワなのじゃあ……！」

いつしかルードは直立の体勢でルオの軽い尻を持ちあげていた。短身のルオは脚の長さもルードに及ばず、膝を伸ばしてもつま先は地につかない。可憐な脚線は腰布と一緒に空中で踊っていた。揺らぎは太ももから股間の括約筋へと伝わり、締めつけがぐりゆぐりゆと変調する。たび重なる抽送で茹であがったペニスにとって、細胞が根こそぎ毛羽立つような快感だった。

「ルオ様、ルオ様あ！ 気持ちいいです、ちっちゃいおま○この締めつけがあ！ ふうう、もう、もう、ダメだあ！」

「あああーッ！ わ、わしもぶつといちんぼ気持ちいいがあ、そろそろ様づけはよさぬかあ……！ はううッ、もつと馴れ馴れしくう……！」

ルオは振り向き、肩越しにイヤイヤと首を振る。飼い主に媚びる犬のような、切なげな目つきだった。がっちり驚づかみで固定された尻をも無理やりよじっている。

東方の龍王はすでに自分のものだという実感が、少年の脳髓を小気味よく痺れさせる。征服感にビクビクッと躍る腰を小刻みに揺らして子宮頸をこすり、性感を鈴口へと集約していく。尿管のよじれるような感覚に、熱い声を落とした。

「アルオ、ルウ……！」

びくんッと少女の背筋が跳ね動く。

その名は、先ほど彼女がルードの耳を塞いで呟いたものだった。

「はんっ、あああッ、聞こえておったか……！」

「黙っててごめんなさい……！でも、もしそれが正しい名前なら、孕ませるときはそれを呼びたいです……！」

竜の牙を抜いて竜の真名を呼ぶ者は、竜の主となる。それがドラゴンの生命摂理だが、牙を抜かずにルオの真名を呼んだところで従属させることはできない。

すこし残念だが、安心もしている。天変地異を引き起こす龍王を従えるつもりは毛頭ない。今はただ、彼女のすべてを味わい尽くしたいだけだ。

(ルオ様の心の奥底も、おま○この、奥もお……！)

狂ったように赤らんだ童穴をほじくり返し、カリ笠で膣襷を掻きむしりながら、たがいの性感を高めていく。すっかり柔軟化した子宮口は、半開きで亀頭の先を受け入れてくれる。もはやペニスとは根元から先端まで、自分のものなのか彼女のものなのかわからない高熱に覆われていた。暴発までの猶予はないに等しい。

「お、お願いです、ルオ様あ！名前を呼びながらイカせてくださいいい！」

「ひゃんうッ！あああ、る、るうどはこわい男じゃあ、雌の心を虜にするすべを知っておるうん！あああん、ドキドキじゃ、アソコまでビクビクでドキドキじゃ……！よいぞ、その名で呼んで受精させよ！」

許しは得られた。蓄積された快感を放出することが、彼女の望みを叶えることにもなる。もはや忍耐する理由はない。

小さくもプリプリした尻肉に深々と爪を立て、猛然と最後の前後動に従事する。尻がパ

ンパンツと小気味よく音を立て、洞穴いっぱいにはふたりの交わりを喧伝していた。

ピリピリと痺れる感覚が頂点に達するのは間もなく、ふたりの股ぐらが泡立った無数の汁糸で繋がったところのことだ。脈動しただけで濡れた媚肉が削げ落ちそうならぬ、激しい快感と血流が陰茎に集中する。

(こんな気持ちいいの、耐えられない……！ ガマンしたら、破裂するう……！)

無上の快楽を与えてくれる幼い肉穴に抗うすべはない。彼女が壊れてしまうのではないかという危惧を抱きながら、ほわりと柔らかな腹に親指を食いこませる。

「くううう！ で、出る、出る！」

「ひあああ、イクッ、イッて孕むう！ ふたり一緒にイッて中出しで妊娠じゃあ！」

幼龍王は浮いたままのつま先をギュッと折った。末端の力みが膣口をねじれさせ、啞えこんだ逸物の根元付近を螺旋状に締めあげる。

最後の快美感に、ルードは身も心も委ねた。

「アルオルウ……！」

「あああ、るうどお、るうどお！ わしの、旦那さまあ！ イックんううううう！」

夢のような法悦がふたりの粘膜を襲った。とくにルードの鈴口においては、すさまじい粘度の塊が引つかかる。ぐぐううう——と出口が圧迫され、鈍痛じみたうずきが頂点まで高まった直後に、

びっ、びゅぶぶッ！

股間が噴水になったかのように勢いよく噴きだした。めくるめく解放感に、下半身の骨が溶けそうになる。あとは一時も留まることなく射精が続いた。

ぶっ、ぴゅぶっ、ぶぷんっ！　びゅばばっ、どびゅっ、びゅううーっ！

内側から尿道を掻きむしられるような快感だった。外側からは磨り潰さんばかりの圧迫と痙攣が、オルガスムスを底上げする。ルオは絶頂の蠢動に身震いをして、肉茎を締めあげていた。

「あああ、びゆるびゆる子宮にい、あつ、は、はらむう、孕むのじゃあ……！」

淫声が鼻を通って高らかに突き抜ける。水面に映った小鼻がヒクヒクッと震える様も、眉間の小さな皺も、最小限の歪みで幼顔を淫乱な雌に作り替えていた。

淫らなのは表面だけではない。子宮から逆流した精液で粘ついた幼肉は、ペニスを巻きこんで内へ内へと収斂している。贅肉に引っかかったカリ首がもぎとられそうだ。

「くうっ、こ、これで孕まなくても、何度でも注ぐよ……！　もっと出すからあ！　小さいおま○こ、ぼくだけの受精穴にするんだあ……！」

「んんんっ、んーっ、んーっ！　はあん、アツアツじゃあ……！　わしのちびま○こ、旦那さまのものお……！　せーえきまみれでホカホカじゃあ、んっっ」

白い肌から立ちのぼる汗の香りを嗅ぎながら、腰をよじって結合の深さを確かめた。次々と溢れる精液を、できるだけ奥のほうに叩きつけたいのだ。

赤らんだ秘裂はよじれに耐えきれず、ぼば、と恐ろしく粘度の高い白液を排出する。ぜ



リー質の固形物が大量に混じっていて、あまりに濃厚で、黄色みを帯びた精液。まとわりつくわずらわしいほどの粘度が小さな膣の中を満たしているのだと思うと、ルードは居ても立ってもいられなくなつた。

細い背に覆いかぶさり、頭頂から突きだした角にちゅつとキスをした。膣口が陰茎の根元近くをキュッと締めつけてくる。

「ああ、角まで愛すとは、たまらぬう……ひんっ、まだ出ておるのう、元氣じゃのう……!! あっ、とろける、あっ、とろけて孕んじやうのじゃああ!!」

「ぼ、ぼくのも、とろけてる……氣持いいよお、ああ、孕ませるのすごくいい!!」
ぐつと腰を押しあげ、幼い媚臀を高めに持ちあげた。いつそう少女のつま先が浮きあがり、子宮口はぐりゆりと掻き割られる。腔内が液汁の充足によつてたぶたぶと波打っているのが、亀頭粘膜に感じられた。

「んはあつ、ひゃひいいッ、あああん! い、愛しいい、愛しゅうて狂おしいぞ、わしの旦那さまあ……!! わしを受精させてくれる旦那さまあ……!!」

小さな身体がどれほど快感に冒されているのかは、筋と贅肉の痙攣と、耳まで広がった桜色で見てとれる。

「あ、ああ……ぼくのこと旦那様って呼んでるのは、なんで?」

「んっ、ああん、夫のことは旦那さまと呼んで敬うが東方の流儀、じゃが……おぬしが望むのなら、あんっ、ご主人様とかおにいちゃんとか、ばばとか坊やとか、ボクちゃんとか、

「ふたりとも脚までべっとり……アソコのお肉は、赤くツヤツヤしてて……」

「ほほ、気持ちよかったから充血が止まらぬのじゃ」

ルオは自分を狂わせた逸物を根元からでろりと舐めあげ、小さなお尻を左右に振った。

「ノアも気持ちよかったの……？」

「は、はい……ルード様のが出たり入ったりすると、幸せな気分になって……中に出されたら、死んでもいいとすら思えて……ちゅっ、んぢゅううう」

ノアは熱心に鈴口を吸っている。目隠しの力はいまだ絶大で、恥じらう気配は見とれない。ルオより数段大きな尻を上下に揺らし、垂れ下がった精液の糸をさらに長く伸ばす。二度の中出しが彼女の心を溶かしたのだ。

ヘルダの口から、羨望の熱い息がこぼれた。

「ルードも……中に出すのが、好きなの？」

「大好きです！ 無礼とわかっていても、ヘルダ様にも出しまくりたいぐらい！」

このときを待っていたと言わんばかりに、心の底からの願望を強く吐きだした。

（どうとう来た……！ このときを待ってんだ！）

すでにヘルダは交尾のことしか考えられないという呆け顔だ。ふわりと広がったスカートも腰のよじれを反映してフルフルと震えている。

「そんなに中出しが好きだなんて、いけないルード……あなたみたいにいやらしい下僕へのご褒美は、やっぱりひとつしかないわね」

ヘルダがうん、とうなずいて自分を納得させているところを、ルードは固唾を飲んで見守った。彼女は興奮を抑えきれない面持ちではあったが、しどろもどろに居丈高な口調で、次の命令を口に出した。

「わたくしの尊い命を救ったご褒美に……わたくしの大切なところで気持ちよくなる栄誉を与えましょう。だから……あお向けになりなさい、ルード」

よっしゃ！ と歓声をあげて飛び跳ねたい気持ちを抑え、言われた通りに横たわる。

「こ、これで、騎乗位ができます。どうぞ、ヘルダ様」

ノアとルオはまだ名残惜しげであったが、左右に避けてもらってヘルダのための道を開けさせた。もはやルードと姫君の間に遮蔽物はない。彼女の目には、出しても出しても収まるどころかいっそう強く勃起する逸物しか見えていないことだろう。

今、肉塊は、彼女のためだけに天を衝いている。ヘルダは立ちあがり、あお向けの少年に近寄る間も、男根に見入って背筋をビクビクッと震わせていた。

「ああ、黒竜を見下ろしながら交尾……ノア、ドレスを脱がせてちょうだい……」

目隠し中のノアをルオが手伝い、王女の衣を脱がせていく。どちらも複雑な表情を覗かせるが、反抗を示すことはない。イカセまくって頭をふやかせたのが効いたのだろう。

姫君の白い肌がはだけていくのを、ルードは亀頭から火の出るような気分で見あげていた。汗を帯びてきらめく雪膚は、極上の竜鱗に劣らず艶やかだ。病の跡も見あたらず、昂揚感に紅潮していく様など、嘔みついて咀嚼したくなるほどだ。

やがて姫君は手袋を残してドレスを脱ぎ去り、下着姿になった。手袋も下着も純潔を表すような白色で、ピンク色に染まった素肌と美しい対比を描く。

腰を思いきり搾りあげたコルセットは窮屈そうだが、乳房の膨らみが浮き彫りとなって色っぽい。なによりも、色違いとはいえノアと同種のガーターベルトとストッキングには、尼僧を思いきり突きまわした記憶をくすぐられてたまらない。

(入りたい……ヘルダ様に、早く入りたい!)

ひたすら快感だけを求めて、赤黒い肉茎がビクンと跳ねる。ヘルダはその様に見とれながら、少年の腰をまたいだ。亀頭の真上で白レースのショーツを脱ぐ。

露わになった王女の花園は、ルードの興奮を極限まで引き上げた。薄桃色の上品な茂みはまばらでありながら、見苦しくない形に整っている。かたくなに半閉じの秘裂は、期待に湿っててらりと輝く。

「で、では……このまま食べちゃうわよ……! あなたの、太いのを……!」

ヘルダが真上から腰を降ろしてきた。小陰の表襲からひと筋の露がこぼれる。ペランダの行為が尾を引いているのか、男根を前に昂っているのか。

「はい、食べてください! いやらしい口で頬ばって、精液もしっかり飲みほして!」

ルードはすがりつくように太ももをつかんだ。ノアほどふくよかでなく、ルオのようにひとつかみできそうなほど細くもない。童女と大人の境目の繊細な肉づきを愉しみながら、すこしだけ引き寄せる。

灼熱の陰部が粘着しい、駆けめぐる甘美な痺れにふたりは身を硬くした。

「あくッ、あつういい……！ はあん……ッ」

「しよ、処女膜破りますけど、お身体はもう問題ありませんよね！」

「よしなに……血が出てても、あなたの精液がお薬だから、このまま奥まで……！」

ふたりとも留まることなく、腰を押しつけあう。上品に縮こまっていたピンクの肉割れが、赤銅色の棒で容赦なく掻き分けられる。ルードが腰を浮かせると、生娘の秘膜がミチミチときしんだ。

ぶちんっ、と肉の裂ける音が粘膜に響くと同時に、ヘルダが紅玉の双眸を剥いた。

「ひっ、あかつ、あああ……！ や、やつぱり痛い……！」

「入ってますよ、下僕のちんぼが、ヘルダ様の処女膜を破って、膣の中に……！」

主の純潔を我が物とした実感が、亀頭いっぱい染みこんでくる。感動に煮沸するカリ首は、同等に熱っぽい肉壁に包まれて、快感に震えあがった。

（こ、これでヘルダ様も、ぼくのものだ……！）

ルードは手に力をこめて、太ももを引き寄せながら突きあげた。清純さを体現するような隘路は、笠でこすられると苦か悦かもわからぬ小刻みな蠕動をきたす。

「ひっ、ひっ、奥くる、あつ、大きい……！」

ヘルダは痛そうに歯噛みをしているが、ルビーの瞳のとろめきはノアやルオが感悦しているときと同じだ。それでも病弱な身体に無理がきたのか、後ろにぐらりとふらつく。

「ノア、ルオ、ヘルダ様を支えてさしあげるんだ」

「は、はい。姫様、大丈夫ですか？」

ノアはヘルダの右脇から腰に手を回した。逆側からはルオが支えながら、片手でコルセットのブラ部分をずらして豊満な乳肉を露出させた。

「ほれほれ、しっかりいたせ。わしの旦那さまにご褒美をやるのじゃろ？」

囁く先はヘルダの口元。龍王の口から漂う甘い息は、薔薇色の媚香と絡みあって姫君に吸いこまれていく。この媚香は薔薇の香とドラゴンの唾液を混ぜたものだという。龍王の吐息も効用に影響するのか、ヘルダの口元は緩み、膣内も潤いを増してくる。

すこしずつ腰がよじれ、白桃色の乳果実がたふんたふんと揺れだした。

「あふうう、ル、ルード、わたくしのご褒美、あんっ、んうっ、い、いかがかしら？」

「さ、最高……！ くっ、中の襲々もたくさんで、すぐくこすれます……！」

亀頭を肉壁に擦りつけ、濡れ肉の内部構造を確かめっていると、ぐぢゅつぶぢゅつと淫音が響きわたった。ときおり弱い部分をかすめるのか、ヘルダの嬌声と乳肉が淫靡に弾む。横から支えているノアの胸も横から叩かれて震えていた。

下から見あげると、これがまたものすごい迫力なのだ。騎乗位はルオと経験済みだが、彼女に乳揺れを期待するのは夜中に日差しを求めるようなものだ。

「……ほほ、旦那さまめ、なんだか猛烈に許しがたいことを考えてはおらぬか？」

ルオは不気味なほど満面の笑みで、ヘルダの赤い乳首をつまんだ。先端だけ固定されて



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

